

令和元年6月26日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K00695

研究課題名（和文）「茶」のトランスフォーム～「関係性の美学」デザイン理論の探求

研究課題名（英文）Transform of tea ceremony 'Aesthetics of relationship'

研究代表者

森野 彰人（Morino, Akito）

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：30453088

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：「茶」が日常性を美的経験へと誘発する装置と捉え、そこにあるヒト、モノ、コトの相互で密な関係性の在り様を解明しようとする分析的な研究方法です。「茶」のトランスフォームの実践は、日本の芸術のもっともすぐれた遺産でもある茶の文化を、これまでにない観点から捉えることとなり、「茶」のもつ創造性と文化的価値を、現代においてより積極的に共有可能なものにするを目的とした研究です。それは「関係性の美学」から新しいものづくりの手がかりやデザイン理論へと発展するものであり、そのことは現代が求める生活の豊かさの実現に寄与するものです。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代は、インターネットをはじめ視覚情報を主体とする媒体で伝達可能な経験と関係性から生み出される価値に偏ったものとなっています。しかし、社会においてはヒト、モノ、コトの相互で密な関係性が存在します。この研究は人と人、人とももの関係性を再定義し、新しい文脈を形作り、「関係性の美学」を要素として抽出することで、現代が求める生活の豊かさの実現に寄与するものです。

研究成果の概要（英文）：In this research, "tea" is regarded as a device that induces everydayness to beautiful experiments. We use analytical research methods to elucidate how humans, things and things are related to each other. In addition, practicing "transformation of tea" is to capture the culture of tea, which is also the finest heritage of Japanese art, from an unprecedented perspective. It makes the creativity and cultural value of "tea" more positively shareable in modern society. In this way, it develops from "Aesthetics of Relationships" to new manufacturing clues and design theories. And that practice contributes to the realization of the richness of life that today demands.

研究分野：陶磁器

キーワード：茶 関係性 デザイン

## 1. 研究開始当初の背景

現代社会は百円均一に象徴される大量の廉価製品、キャラクターが転写された器類、また、そのようなプロダクトと拮抗するように手造り感に溢れる工芸作品、幅広く自由であると同時に無根拠な造形が氾濫する時代である。このような現代社会の求める豊かな生活に向けたものづくりの質は、素材や形状、技法など、制作、デザイン決定プロセスにどの様に関わるのか、あたらしい美学、理論の必要性を感じていた。その手がかりとして日本の「茶の文化」に着目し「茶」を、所作と結びついた道具が、人と人に関係づけ、新しい文脈を形作りながら美的経験を誘発する装置と捉え、現代への適用を実践し、現代のものづくりに求められる、「関係の美学」デザイン理論の探求が行えるのではないかという本研究の着想に至った。

## 2. 研究の目的

「茶」が人と人の出会いで起きる日常行為を濃厚で特別な美的体験へ変換することに着目し、「ヒト」・ヒエラルキー、関係性、「モノ」・道具、そして「コト」・所作と関わる身体的知覚、という3つの相互的關係の中から新しい価値創出がどのように行われたか、所作と結びついた道具が、人と人、人ともものをどのように関係づけ、新しい文脈を形作ることができたかについて検証する。そこから、「行為」と「形」として還元的に要素を抽出することにより、現代の日常に適用し、「茶」のトランスフォーム」として実践する。このように、日常性を美的経験へと結びつけるモデルを創出、実践し、現代が求める生活の豊かさの実現に寄与するとともに、ものづくりのデザイン・プロセスの根拠となる「関係性の美学」デザイン理論を探求するのが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

「茶」に関わる空間、道具、歴史を調査対象とし、「茶」はどのようにして、新しい文脈を形作りながら美的経験を誘発する装置として機能したか、それをヒト、モノ、コト、の3つの相互關係から検証した。次に、茶の現代への適用に向けて、積極的な関係性の組み合わせから試作検証を行った。現代の生活様式、社会・文化的制度と照らし合わせながら「行為」「形」という形で抽出を行い、美的経験の為のさまざまなモデルの試作を行い、「茶」のトランスフォームの実践を行った。同時に、これらの裏付けとなる「関係性の美学」デザイン論を探求した。これらから導き出された成果を様々な「茶会」の形で公開し、これまで気づかなかったヒト、モノ、コトの關係性を様々な形で社会へ還元する研究とした。

## 4. 研究成果

研究成果は調査から導きだされた「関係性の美学」に基づく様々な試作作品と、その試作を用い、「茶」のトランスフォームの実践の場としての「茶会」である。

28年度は27年度の調査に基づいた「関係性の美学」の試作として研究代表者の森野は自身の個展において、「瑠璃釉金彩」茶入れや茶碗など様々な美的体験のモデルを発表した。また、共同研究者の松井と共に、東京、寺田倉庫本社 2F「OMBLE」にて実験的茶会を実践した。本茶会は松井が以前にNASA、JAXSAとともに実践した国際宇宙ステーションから「宇宙」を詰めて

持ち帰ったボトルを手にする「手に取る宇宙-Message in a Bottle」との共同開催である。JAXSAの研究者や天文学者、美術関係者など様々なジャンルに関わる人たちが集まった。共同研究者の松井はこの茶会の延長とし、天文学者である本原顕太郎と共に富士山山頂にて「手に取る宇宙茶会」を実施した。この茶会が30年度に実施したハワイ・マウナケア山頂「すばる天文台」での茶会へと繋がるものであった。

29年度は研究代表者の森野は28年度行った中国調査から中国の古典文様やその意味などを用いた、様々な試作を制作し、個展にて発表した。これは文様を装飾的視覚デザインとしてではなく、ヒトとヒト、ヒトとモノを結びつけるものとして捉えたものである。吉祥文様の持つ意味と文脈が道具を単に使うものから、人と人を結びつけるものへと変換するのである。現代において陶磁器作品は美術的価値の観点から捉えることが多く、これまで、有してきた役割へ目を向ける事がなくなってきた。このことは本研究の目標である近代の自立した美的価値に基づくデザイン理論にかわる「関係性の美学」デザイン論へと結びつくものあると同時に、美術史における陶磁器の捉え方に新たな視点をもたらすものである。

「茶」のトランスフォームの実践の場としての「茶会」は共同研究者の松井と共に、京都下鴨神社「鴨社資料館秀穂舎」にて行った他、2017年度アートミーツケア学会総会において、学長の鷲田清一を席主にした「不意の茶会」を監修した。この茶会は奈良の「たんぼぼの家」のアーティストとの共同作業で研究代表者の森野の指導のもと茶碗、菓子皿を制作した。また、研究分担者の藤野の指導により空間を演出する茶室全体を覆う布蚊帳を制作した。制作時、本学の学生や卒業生が参加し、多くの人たちの共同作業とする事で健常者と障害者の関係性を捉え直すきっかけを多く人に与える事が出来た。茶会においても、おもてなしなど様々な共同作業の機会を設け、人と人の関係性、場の持つ意味などモノが持つ価値の変換などを多くの参加者が捉え直すきっかけとなった。



30年度は最終年度に予定していた展覧会としての成果発表から、「茶」のトランスフォーム

の実践の場としての「茶会」を様々な形で他のプロジェクトなどとの共同事業として行った。展覧会といった情報が一方通行に発信される形態での成果発表より、これまで行ってきた「茶会」を通し、人と人が濃密な関係を持ち、ヒト、モノ、コトの関係性が織りなす新たな価値がより実感できると確信したからである。8月「アーティスト×モノ×茶会」として現代美術作家である田村友一郎の展覧会「叫び声/HeII Scream」において「嘯く茶会」を実施した。展覧会場を地獄に見立て閻魔大王の濃茶に始まり、カウンターテナーの歌声に導かれ「忘却の茶」を飲み地獄から解放される茶会とした。



次に「身体相互行為と茶会」として下鴨神社三井別邸茶室にて人類学者であり現在、科学研究として「作動の相互行為論-茶席における会話と所作の分析から」の研究代表者である木村大治、本学伝統音楽研究センター藤田隆則に参加していただき、身体的・感覚的な相互行為の空間としての「茶会」におけるコミュニケーションの技法に着目し、見る／見られる場鑑賞／交流の場としての茶会を実践した。次に「茶会における鑑賞と交流」の観点から京都御所「翠寿亭」において煎茶-茶庵次期家元佃梓央を迎え、戦国武将の濃茶と江戸町人の煎茶の特徴を抽出し双方の「人」「形」「行為」やヒト、モノ、コトの関係性を参加者たちが再考する起因とした。

これらは、本学が文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」である「状況のアーキテクチャー」の人材育成講座の講義として行った。また、28年度の延長でハワイ、マウナケア山頂にある「国立天文台ハワイ観測所すばる望遠鏡」、ハワイ・ヒロの裏千家「松浪庵」にて「手に取る宇宙茶会」を実施し、国内外の研究者20名、他、ヒロ裏千家の人々が参加した。





最終年度であった30年度は日常性を美的経験へと結びつけるモデルの様々な成果を用い、他のプロジェクトとの共同事業などを通し、日常性の中に潜む美的経験への気付きへと結びつけ、現代が求める生活の豊かさの実現に寄与する「関係性の美学」デザイン理論を「茶」のトランスフォームの実践の場としての「茶会」を通し多くの人に広げることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：松井 紫朗

ローマ字氏名：(MATSUI, Shiro)

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：美術学部 / 美術研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：60275188

### (2)研究分担者

研究分担者氏名：藤野 靖子

ローマ字氏名：(FUJINO, Yasuko)

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：美術学部 / 美術研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：50363966

### (3)連携研究者

連携研究者氏名：永楽 善五郎

ローマ字氏名：(EIRAKU, Zengoro)

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：美術学部 / 美術研究科

職名：特任教授

研究者番号：60751138

(4)研究協力者

研究協力者氏名：生形 貴重

ローマ字氏名：(Ubukata, Takashige)

(5)研究協力者

研究協力者氏名：本原 顕太郎

ローマ字氏名：(Motohara, Kentaro)

(6)研究協力者

研究協力者氏名：木村 大治

ローマ字氏名：(Kimura, Daiji)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。